

奈良女子高等師範学校附属幼稚園の保育観

— 大正13年～昭和14年の『うなみの園生』を中心に —

松島英恵¹⁾*

1) 新見公立大学健康科学部健康保育学科

(2021年9月22日受付、11月17日受理)

奈良女子高等師範学校附属幼稚園では、森川正雄が主事であった時期（大正3年から昭和14年）の大正13年に保護者による後援会が発足し、後援会冊子として『うなみの園生』が発行された。森川を始め、職員や保護者の記事が記載され、それぞれの保育観がうかがわれる。当時の校長であった横山栄次により生産主義が導入され、実用的作業が手技や観察の保育内容として取り入れられたことが明らかになった。子どもの発達特性や個性、家庭環境の理解がまず必要であるとする森川の保育観が保母たちにも理解され、保育観の根幹となっていた。子どもの発達や社会の必要に応じた躰の在り方は、日々の子どもの姿から捉えられ、家庭を指導しながら共に子どもを育てようとしていた。時局の影響を受け、保育内容が戦争にまつわるものが増えていく中でも、基本的な保育観は変わらなかった。

(キーワード) 『うなみの園生』、保育観、幼児教育

1. はじめに

『うなみの園生』は、大正13年に発足された奈良女子高等師範学校附属幼稚園（以下、奈良女高師附属幼）後援会が編集発行した冊子である。当時の主事であった森川正雄のみならず、奈良女高師の学校長や附属小学校訓導、附属幼稚園保母、校医や保護者の記事、保育資料や研究資料、沿革や後援会事業報告など内容は多岐にわたり、それぞれの保育観や、保育内容、子どもの姿が具体的に浮かび上がって大変興味深い。そこで『うなみの園生』を中心に、奈良女高師附属幼の保育観を考察することとする。『うなみの園生』は大正13年から昭和17年までの20年にわたって発行されているが、その間の創刊当時から17年間森川正雄が主事であった。主事による保育観の影響は大きいと考えられるため、本稿では創刊号から森川が退職するまでの昭和14年第17号までの16冊を対象に考察することとする。

2. 『うなみの園生』とは

2-1. 『うなみの園生』について

『うなみの園生』は後援会設立の大正13年11月に創刊され、第1号と第2号を合併し創刊号として発行している。創刊号によると、奈良女高師附属幼後援会は大正13年4月に、園児の保護者を正会員、修了児保護者を賛助会員として組織し設立された¹⁾。当時幼稚園入園希望者が増加し、大正元年創立当時は70名だった園児が、大正5年に120名、大正

6年には160名、大正13年には220名に増加したこと、大正9年に奈良女高師に保母養成科が開始し、園舎の一部が寄宿寮として使用されたこともあり、園舎が狭溢していたが²⁾、教育予算は潤沢ではなかった。そこで「国家社会組織上の基礎観念、自然科学上の基礎知識、保健衛生上の基礎訓練及社交場の基礎習慣等涵養の目的を以て」経費を運用し事業の達成を希望し、衛生部・保健相談部を設置、講演会開催、託児所の開設、植物園の拡張、玩具類の充実、動物愛護の奨励、運動器具の完備、幼児の遠足及旅行、校地校舎の整備を行いたいとして後援会が立ち上がった³⁾。後援会は園舎増築、備品購入など幼稚園の事業を援助することと同時に、家庭と幼稚園との連絡機関となることも大きな目的としており、家庭と幼稚園の通信誌として『うなみの園生』を編集発行した⁴⁾。

『うなみの園生』は1年に1回発行されている。前年度の後援会事業報告の為、4月～8月に発行されているが、第6号からは7月発行で定着した。昭和16年は発行されず、昭和17年に第19号と第20号を合併発行したものが最後の発行となり、18冊発行された。現在奈良女子大学附属幼稚園に保存されているが、第18号は公開されていない。第5号が最多の189ページ、第19号20号合併号が最少の94ページで、平均135ページの冊子である。

2-2. 執筆者

『うなみの園生』発行時の奈良女高師附属幼の主な職員は、校長が横山栄次（大正8年7月～昭和7年3月）、稲葉彦

*連絡先：松島英恵 新見公立大学健康科学部健康保育学科 718-8585 新見市西方1263-2

六（昭和7年6月～昭和13年4月）、日田権一（昭和13年4月～昭和20年4月）であった。主事は森川正雄（大正3年4月～昭和14年7月）、日田権一（昭和14年7月～昭和16年3月）、小川正通（昭和16年3月～昭和27年8月）であった。主席保母は會澤タガエ（大正2年9月～昭和15年3月）、赤羽吉子（昭和15年～昭和17年3月）、浄謙チサ子（昭和17年4月～昭和22年9月）であった⁵⁾。

主に奈良女高師附属幼の職員と、後援会会員が執筆しているが、奈良女高師の教授や附属小学校訓導、園医の記事も掲載されている。

2-3. 掲載内容

口絵に園舎や集合写真、遊びの様子などの写真が載せられている。記事は説苑、寄書、保育資料及研究、幼稚園記事、後援会記事、附録などがあり、年によって表記が変わることがある。説苑は校長や主事、寄書は奈良女高師の教授や附属小学校訓導、附属幼稚園保母や後援会会員の記事が掲載されている。基本的に保護者に向け、保育方針や活動報告、家庭教育啓発の内容となっているが、記事のテーマは各自の自由であったようだ。第4号からは附属幼稚園の保母が全員記事を書くようになり、各保母が保育方針やクラスの子どもの様子を伝えるクラスだよりのような内容も含まれている。保育資料及研究は、幼児の発育調査の結果や医師の記事、通園状況、家庭状況、木工遊びや園芸、玩具などの教材研究が掲載されているが、第7号からは幼稚園記事の項目にまとめられるようになった。幼稚園記事は他に附属幼稚園の沿革及概況、職員や幼児の名簿、園行事の記事が掲載されている。後援会記事は前年度の後援会会計業務報告や、予定、会員名簿が掲載され、附録に附属幼稚園規則、同保護者心得、同後援会会則などが掲載されている。主な記事については表1の通りである。

3. 『うなるの園生』からうかがえる保育観

3-1. 生産主義

・昭和3年第6号「附属幼稚園の沿革及概況」に「大正十五年四月幼稚園令が發布せられたが、当園規則も改正せられて保育課程の部分に観察、図画の二項目が加へられ、又保育料が二円に改められた。此の年度に於て手工及園芸の二つについて特に施設する所があり、生産主義の教育を加味することが著しくなった。」⁶⁾と記載され、その後第17号まで同様に記載され続けている。

・横山は生産主義について、昭和2年第5号「生産主義の幼稚園教育」、昭和6年第9号「働く気持ち」、昭和7年第10号「所謂作業主義の起り（フレーベル氏の功績）」で述べている。第5号には「幼年の時から實際生活に役立つやうな教育をしたならばそれだけの効果がきつとあるい相違ない」と述べ、主事の森川の理解も得て、幼稚園教育に生産的で実用的な活動を取り入れ、園芸などの施設をつくることにしたと記述している⁷⁾。第9号では「幼稚園では働く気持ちを養成することが殊に大切である。」とし、中学校で作業科が導入されたことを受けながら、幼稚園でも勤労を愛する習慣をつくるために、園芸や手芸、掃除や整頓など生産的実用的な仕事を取り入れるべきであると述べている⁸⁾。第9号からは生産主義ではなく、作業主義と表記されるようになった。第10号では、日本の教育改善に作業教育または労作教育が導入されているとし、労作学校を設立したドイツのケルシェンシュタイナーにふれながら、その教育の源泉はフレーベルにあり、フレーベルが起こした幼稚園では作業主義が取り入れられるべきであると主張している⁹⁾。横山がドイツのケルシェンシュタイナーからの影響や、日本の教育改善の動向などから、積極的に幼稚園への生産主

表1. 『うなるの園生』主な記事

西暦	元号	号	主な記事	主な幼稚園の出来事	備考
1924	大正13	1.2 (創刊)	横山栄次(校長)「幼稚園教育の重要な訳」、真田幸憲(高女主事)「発刊を祝して一言す」、木下竹次(附小主事)「わたくしの希望」、森川正雄(主事)「幼稚園教育の意義」、省部顕宜(全主事)「祝辞」、會澤タガエ(首席保母)「回顧」、田村好(全首席保母大倉ハナ)「祝辞」、会員寄書、保育資料及研究、幼稚園記事、關信太郎(会長)「後援会設立の経過と所蔵」他	・4月後援会設立 ・10月後援会特別事業として2階建て園舎を寄付	森川「幼稚園の理論及実際」
1925	大正14	3	森川正雄(主事)「奈良の子供の環境と其教育」、會澤タガエ(首席保母)「入園式」、浄謙チサ子(保母)「感じのまま」、山路平市(附小訓導)「遊びの善導は教育の眞」、森川正雄「玩具の選び方」、保育資料及研究、幼稚園記事、後援会記事 他	・後援会より猿及猿舎、築山・トンネル、棧橋及砂場寄贈	
1926	大正15 昭和元	4	森川正雄(主事)「子供の眞の要求と眞の幸福」、桑野久任(女高師教授)「奈良にも『子ども』の春が来た」、會澤タガエ(首席保母)「天真爛漫」、秋田喜三郎(附小訓導)「尋一兒を受持って」、関えみ(保母)「思ひのまま」、浄謙チサ子(保母)「二人のお母さん」、北山ナホ(保母)「幼児と音楽について」、小平コウ(保母)「所感」、松浦喜美子(保母)「母に復りゆく幼児の心」、保育資料及び研究、幼稚園記事、浄謙チサ子「玩具だよ」、後援会記事、森川正雄「回顧二年」他	・「幼稚園令」發布、幼稚園規則改正。保育課程に「観察」「図画」を追加 ・手工園芸施設を新設、生産主義を加味	「幼稚園令」
1927	昭和2	5	横山栄次(校長)「生産主義の幼稚園教育」、森川正雄(主事)「園芸及手工の新設備に就て」、小野新太郎(女高師教授)「消極的家庭教育」、真田幸憲(高女主事)「幼児の着物」、秋田喜三郎(附小訓導)「一年の子」、森川正雄「子供の天分と母親の使命」、會澤タガエ「思ふことの一ふし」、小泉九二子(保母)「感謝の一言」、関えみ(保母)「小さき園丁」、小平コウ(保母)「思ひ」、松浦喜美子(保母)「兎の行方」、江口稔子(保育囃託)「思ひ出より」、大隈はま(保育囃託)「子供のころ」、保育研究資料及研究、玩具だよ、後援会記事 他		
1928	昭和3	6	森川正雄(主事)「子供の遊戯及作業の価値」、會澤タガエ(首席保母)「新しい幼児を迎へて(七の組)」「AB物語」、小泉九二子(保母)「一日の出来事(二の組)」、関えみ(保母)「新入園児を迎へて(三の組)」、小平コウ(保母)「をさなごころ(六の組)」、松浦喜美子(保母)「朝のスケッチ(一の組)」、江口稔子(保母)「所感(四の組)」、田中カツ(保母)「第五保育室より(五の組)」、會澤タガエ「木工遊びに就て」、松浦喜美子「園芸だよ」、幼稚園記事、後援会記事 他	・ご即位の大札による記念事業で2階建て園舎建築及び遊戯室拡張	森川「幼稚園・託児所育児法」「保母用教育学」

奈良女子高等師範学校附属幼稚園の保育観

1929	昭和4	7	横山栄次(校長)「子供と環境」、森川正雄(主事)「眞を愛する心の習慣の養成」、會澤タガエ(首席保母)「六月の或る日」、塚本清(附小訓導)「塩昆布を切らせる」、小泉九二子(保母)「子どもの嘘言について」、関えみ(保母)「私はしあはせだ」、小平コウ(保母)「思ふこと」、江口稔子(保母)「折にふれて」、田中カツ(保母)「私の方針の一端を」、長屋サト(保母)「子どもの心」、森田静代(保母)「育児の一片」、幼稚園記事、田中カツ「玩具だより」、後援会記事他		
1930	昭和5	8	横山栄次(校長)「共に遊ぶの心」、坂田静夫(会長)「富貴ちゃんの記」、森川正雄(主事)「子供の生活の研究」、大浦茂樹(附小訓導)「幼児の持物にはすべて記名いたしませう」、會澤タガエ(首席保母)「雑感」、関えみ(保母)「二の組のお母様に」「ジェス子さんのお別れに際して」、小平コウ(保母)「或日の感想」、江口稔子(保母)「子供のために」、田中カツ(保母)「更に心に印して」、長屋サト(保母)「偶感」、渡邊浦(保母)「所感」、幼稚園記事、田中カツ「玩具だより」、後援会記事他	・炊事室を新設(飯事実現室)	
1931	昭和6	9	横山栄次(校長)「働く気持」、森川正雄(主事)「幼児の産業生活」、會澤タガエ(首席保母)「小さいお客様」「思ふことの一ふし二ふしを」、関えみ(保母)「ひとりごと」、小平コウ(保母)「子供をみつめて」、江口稔子(保母)「お弁当時間のスケッチ」、長屋サト(保母)「遊び」、佐々木静子(保母)「子供の性癖について」、藤田美都枝(保母)「日記の一節二節」、幼稚園記事、後援会記事 他		満州事変 森川「幼稚園の経営」
1932	昭和7	10	稲葉彦六(校長)「御挨拶」、横山栄次(前校長)「所謂作業主義の起り(フレーベル氏の功績)」、坂田静夫(会長)「三田谷治療教育院の一日」、森川正雄(主事)「幼児性格の発達について」、會澤タガエ(首席保母)「思ふ事の一ふしを」、関えみ(保母)「ひとりごと」、江口稔子(保母)「日記から」、服部トク枝(保母)「緑に包まれて」、佐々木静子(保母)「愚見」、藤田美都枝(保母)「幼稚園での遊び」、渡邊住江(保母)「四の組のお友達」、正会員(保護者)記事6件、幼稚園記事、後援会記事他	・3月横山校長退官 ・6月稲葉校長就任	
1933	昭和8	11	稲葉彦六(校長)「日光」、坂田静夫(相談役)「回顧随筆」、森川正雄(主事)「快感と良習慣の形成」、會澤タガエ(首席保母)「二の組だより」、関えみ(保母)「私の使命」「七の組教生の日記の断片と附記」、江口稔子(保母)「子供と俱なる感謝」、服部トク枝(保母)「御家庭へのお願ひ」、佐々木静子(保母)「子供と衣服」、藤田美都枝(保母)「天真爛漫」、渡邊住江(保母)「虚言」、正会員記事、幼稚園記事、後援会記事 他		
1934	昭和9	12	稲葉彦六(校長)「眠について」、二塚頼吉(会長)「珠玉を磨く」、森川正雄(主事)「幼少年者の模倣性」、會澤タガエ(首席保母)「お弁当」、関えみ(保母)「荣誉ある日本よ」「眞の母性愛」、江口稔子(保母)「四の組だより」、服部トク枝(保母)「我が日毎」、佐々木静子(保母)「叱り方に就ての愚見」、藤田美都枝(保母)「こどもたち」、梶田正子(保母)「六の組便り」、田村藤助(幹事)「伸びる力を導く」、幼稚園記事、後援会記事 他	・5月1日奈良女子高等師範学校開校25周年記念式	
1935	昭和10	13	稲葉彦六(校長)「御飯」、森川正雄(主事)「富か力か」、徳田浄(女高師教授)「子に関する話」、野中吉光(大阪市立北市民館長)「葛と夾竹桃」、清水甚吾(附小訓導)「幼児と其の教育」、會澤タガエ(首席保母)「二の組だより」、関えみ(保母)「三の組の保護者の方に」、江口稔子(保母)「六月の所感」、服部トク枝(保母)「感想のひとつし」、佐々木静子(保母)「御家庭の皆様へ幼稚園教育の理解を望む」、大上みち(保母)「五の組便り」、梶田正子(保母)「御家庭に於けるお子様方の図画指導の御参考までに」、石原昌(理事)「正直な子供の耳」、幼稚園記事、後援会記事 他		
1936	昭和11	14	稲葉彦六(校長)「母の會について」、二塚頼吉(会長)「母の會とその責任」、森川正雄(主事)「母の會の事業」、會澤タガエ(首席保母)「雑感」、関えみ(保母)「ご家族の立派な一員に仕上げたい」、江口稔子(保母)「五の組便り」、服部トク枝(保母)「感想のひとつし」、大上みち(保母)「強くやさしい子供に」、梶田正子(保母)「二の組のお母様へ」、浅野美都(保母)「お母様方へ」、評議員正会員記事、幼稚園記事、後援会記事 他	・5月母の会発足	
1937	昭和12	15	稲葉彦六(校長)「行啓を仰ぎ奉りて」、森川正雄(主事)「行啓を拝するの記」、會澤タガエ(首席保母)「随感」、関えみ(保母)「お母様を通じて」、江口稔子(保母)「お弁当について」、豊嶋トク枝(保母)「このごろ」、大上みち(保母)「雑感」、浅野美都(保母)「一の組便り」、柘植順子(保母)「七の組だより」、杉田ヒデ(保母)「お母様方へ」、後援会母の会幹事理事の記事、幼稚園記事、後援会記事 他	・6月27日皇太后陛下行啓	志那事変
1938	昭和13	16	日田権一(校長)「保育は楽しみか、苦しみか」、二塚頼吉(会長)「時局と園児」、森川正雄(主事)「幼時に於ける民族優越性の獲得」、小清水卓二(女高師教授)「幼児と植物」、會澤タガエ(首席保母)「就後のお母様方に」、関えみ(保母)「母の愛の發揮を願ふ」、江口稔子(保母)「所感」、浅野美都(保母)「六の組便り」、小林尉代(保母)「雑感」、柘植順子(保母)「お子様の絵に就いて」、杉田ヒデ(保母)「所感」、大谷たか子(保母)「お砂場にて」、幼稚園記事、後援会記事 他	・4月稲葉校長退官 ・4月日田校長就任	
1939	昭和14	17	日田権一(校長)「青少年学徒に賜りたる物語を奉戴して」、森川正雄(主事)「本誌発刊満15周年」、會澤タガエ(首席保母)「二の組便り」、関えみ(保母)「理想的人物に」、江口稔子(保母)「所感」、杉田ヒデ(保母)「所感」、水谷えい子(保母)「雑感」、大谷たか子(保母)「一の組日記抄」、山口エミ子(保母)「朝の集い」、幼稚園記事、後援会記事 他	・7月森川退官	青少年学徒に賜りたる物語

義の導入を指揮し、後援会の協力も得て園芸や手工の設備を作ったと考えられる。

・森川は生産主義について、昭和2年第5号「園芸及手工の新設備に就て」、昭和3年第6号「子供の遊戯及作業の価値」、昭和9年第9号「幼児の産業的生活」で述べている。第5号では、子どもが大人の職業を模倣しながら自分が産業世界の一員であることを学び、また自ら作業することを好むという発達の特性にふれながら、「幼稚園では手技で製作、観察で園芸飼育、科学的知識の基礎や実物実地の経験をさせ、産業の意味を知らせ、仕事を好愛する念をつくろうと苦心している」とし、幼稚園で生産主義を取り入れていることを伝えている¹⁰⁾。第6号では、「幼児の遊戯と作業とは人生の実生活における予習ともみなすことができる。」と述べ、積み木や砂遊び、木工遊びや園芸、飯事遊びなどの遊戯や作業を善用利導して、大人になって生活するための素力を養いたいとした¹¹⁾。第9号では第5号、第6号で述べた

ことを繰り返しながら、校長の指示に基づいて導入した生産主義の教育が好結果を得つつあると述べている¹²⁾。横山の指示で導入されているが、森川自身の保育観からも生産主義について積極的に導入していたようだ。

・保育の実際として昭和3年第6号に「木工遊びに就て」¹³⁾「園芸だより」¹⁴⁾、昭和4年第7号「玩具だより」¹⁵⁾、昭和5年第8号「玩具だより」¹⁶⁾において、研究報告として園芸や手工の設備での遊びや仕事の様子や教育の効果について述べられている。昭和6年第9号では會澤が「小さなお客様」において飯事実現室(炊事室)を利用した「飯事の実演遊び」の報告をしている¹⁷⁾。その後も木工遊びや自由製作、社会遊びの記述、飼育栽培についての報告は続き、保母たちも施設が整えられてきたことを喜び、実用的な遊戯、仕事を保育に取り入れていたことがわかる。自由遊びの様子やダンスのような遊戯についての報告もあることから、実用的な遊戯や仕事以外にも教育的価値を認めてい

たことも推察される。

3-2. 幼児理解

・『うなみの園生』は保護者向けの冊子であり、教育方針を伝え家庭教育啓蒙をはかる役割を担っている。森川の記事には必ず子どもをどのように理解すべきかということが述べられている。時には身体的発達の側面から、時には子どもの本能の面から、時には海外や国内の教育観も引用しながら保護者にも理解できるように説明がなされている。昭和5年第8号「子供の生活の研究」において具体的な子どもの姿をあげ、大人とは違う子どもの生活を理解して接するべきであると述べている。例えば「子供の周囲の事物は悉くみな子供の経験の問題である。子供は是等の事物が何であるか、どうなっているのか、何故にさうであるのかと、好奇心を友として疑問の解決に没頭し、少しの休む時もなく、努力し活動し続ける。花や果実や虫や魚や、玩具や絵本や、或は書齋や台所や床の間の何やかやも、みな、手に取っていじって見ねば承知しない。子供のこの研究心を助長する為に大人自身の生活を調和的に変容する所に大人の聡明さが見られる」というように、子どもの行動の理由や意義を丁寧に捉え、理解した上での大人の態度について提案している¹⁸⁾。

・會澤は昭和2年第5号「思ふことの一ふしを」の記事で、「子供は自発的に自分で遊ぶ、子供同士に遊ぶことを好む」為、子ども同士が楽しく遊べる環境を整えることが大切であると述べている¹⁹⁾。昭和11年第14号では「子供の我楽苦多を大切にすること」として、大人にはがらくたに思える物も、子供にとっては宝物であり、好奇心や収集欲は子どもの自然の要求であり、これが子どもの相違や学問的探求心を育てると伝えている²⁰⁾。

・保姆の小泉は昭和4年第7号「子供の嘘事について」において、子どもの嘘を13通りに分類して説明し、理解した上での大人の態度について述べている²¹⁾。同号において保姆の小平は子どもの喧嘩について、それまでの生活経験の中で共同遊びができないなど原因を探り、「感じやすい子、素直な子、執念深い子、勝気な子等々、相当に手加減を要するが」子どもの性格に応じた関わりが必要であると述べている²²⁾。

・子どもを大人だけの感覚で一方向的に扱うのではなく、子どもの発達の特性や個性を理解し、子どもの気持ちに寄り添った上で保育をしようとしていたことがわかる。この姿勢は、子どもの発達特性を丁寧に捉えようとする森川の幼児理解に基づいたものであったのではないかと考えられる。

3-3. 躰

・3-2で述べたように、『うなみの園生』は家庭教育啓蒙の役目を担っており、躰に関する記述が多くみられる。

・森川は大正14年第3号で「金剛石も磨かずば玉の光はそはざらん」という教訓を引用しながら子どもの本能や性を純化するよう導く大人の指導の必要性について説いている。また徳性の形成について父母教師の態度や躰が肝要であることや、物質的報酬ではなく無報酬で行うべきことなど具体的に述べている²⁴⁾。

・昭和7年校長に就任した稲葉彦六も昭和9年第12号「躰について」において「躰と厭迫、自由と我儘を能く区別すること」が重要で、「西洋かぶれの自由主義」を批判し、家庭における日本の社会に望ましい躰と、幼稚園における社会的訓練の両方が必要であると述べている²⁵⁾。

・保姆たちの記事にはさらに具体的な子どもの姿から、家庭の躰について啓蒙する趣旨の内容が多く示されている。保姆の浄謙は大正15年第4号「二人のお母さん」において、着物を汚すなという母親が子どもの遊びを制限し、さらには着物の汚れを人のせいにするようになった事例や、駄々をこねると物を買って与えるというように大人がその態度を変えてくれることで我儘を助長する事例等をあげ、母親の躰に対する姿勢が子どもに大きく影響すると述べている²⁶⁾。會澤は昭和3年第6号「新しい幼児を迎えて」において新入児の性癖について泣き癖、叩く癖など具体的にあげ、大人の言うことを聞かないようになっていてを嘆いている。幼稚園では子どもの活動を重んじ、「無理な小言は言はない」ようにしているが、性癖の矯正は難しいので「自分達の子供に将来悪むべき性癖があると見ましたら、一家中のものが力を合わせまして其のお子様、其の御愛子の為に力強く躰けて頂きたいと存じます」と述べている²⁷⁾。昭和4年第7号で保姆の森田は、子どもの虚栄心の芽生えを促してしまう大人の態度に触れ、物質的な事に注目することや、表面上の誉め言葉の危険性、極端な厳格や放任も子どもを不幸にする危険があり、子どもの天性に従って理想に向かって善導することが大切だと述べている²⁸⁾。昭和5年第8号で保姆の渡邊は保姆の言うことを聞かない子どもについて、家庭で叩かれながら叱られることが原因ではないかと述べ、保護者に注意を促している²⁹⁾。幼稚園で保育者の言うとおりにならない子どもは、家庭での躰に原因があるとし、家庭での躰方について考えてほしいという保姆の愚痴にも近いようなメッセージを強く感じる。しかし同時に子どもの行動について背景を探り、原因や発達、個性に応じて援助し、躰けようとする姿勢もまたうかがえる。

・躰は家庭と幼稚園が協力して取り組むものであること、厳しい内容のものもあるが子どもの真の自由のために不可欠であること、子どもの発達や個性、家庭環境などの原因を把握して適切な方法をとることなどの保育観が、森川始め校長や保姆とも共有されていたと考えられる。また、この時代は幼稚園側が家庭を指導するという感覚であったことも推察される。

3-4. 時局の保育

・昭和12年の志那事変（日中戦争）以降、時局についての記事が一気に増える。それまでも自由遊びにおいて戦争ごっこなどの姿は常に見られていたが、昭和13年第16号記事二塚「時局と園児」³⁰⁾、森川「幼時に於ける民族優越性の獲得」³¹⁾、會澤「銃後のお母様方に」³²⁾などタイトルだけを見ても時局が保育に大きな影響を与えていることがわかる。これは奈良女高師附属幼稚園だけではなく、東京女子高等師範学校附属幼稚園の主事であった倉橋も昭和12年『幼児の教育』において「現下の時局と幼児保育」というテーマで記事を掲載し、日本人の性情の涵養や銃後の保育について述べている³³⁾。時局の保育は第二の国民を養成する為に、日本民族としての誇りをもたせることや、身体や精神の健康を増強していくことがより重視される方向に進んでいった。よって躰方に関しても昭和13年第16号記事で會澤が「よく大人の命令に服従する事の出来る様に習慣づけて置く事が肝要」³⁴⁾と主張するような、厳しいものとなっていった。いずれ国家の為に役立つ人間に育つように躰方は厳しくなり、保育内容も兵隊に感謝することを促す談話、運動会では「演習ごっこ」をするなど時局に関係のある内容が増えていった。

・子どもの自由遊びの描写はそれまでと変わらず、のびのびと過ごしている様子はいかがである。保姆の浅野が昭和13年第16号「六の組便り」に書いた記事を抜粋すると「今ではすっかり馴れつ子になつて、鉄砲かついで元気に兵隊ごっこ、柘榴の記の下で莫塵を敷き仲良く飯事遊び、ブランコ、スベリッコ、又私の姿を見つけて子犬の様にとび付いてきて腕やバンドにぶら下がる…砂場で砂まみれになつて一心にトンネルを掘る幼児の姿、頬をふくらませ、口元をゆがめて小さい包丁で草の御馳走を刻む子供の姿程純で美しいものはないと見ていてほんとうにはほえましく思ひます」³⁵⁾というように、子どもらしい姿が大切にされている。子どもの発達特性や個性を研究することから保育を始めようとする姿勢を基本とすることは変わらず、社会から求められる教育観も受け入れながら、子どもの生活と社会を結び付けていったと考えられる。

4. おわりに

『うなみの園生』は保護者向けの冊子であり、当時の奈良女高師附属幼稚園の保育観に迫るには浅薄なものになることは否めないが、幅広く当時の職員の保育観にふれることはできた。当時の校長であった横山により生産主義が導入され、実用的作業が手技や観察の保育内容として取り入れられた。また、保育にあたってまず子どもの発達特性や個性、家庭環境の理解が必要であるとする森川の保育観が保姆たちにも理解され、奈良女高師附属幼稚園の保育観の根幹となっていたことがわかった。子どもの発達や社会の必要に

応じた躰の在り方は、日々の子供の姿から捉えられ、家庭を指導しながら共に子どもを育てようとしていたこともわかった。時局の影響を受け、保育内容が戦争にまつわるものが増えていく中でも、基本的な保育観は変わらなかった。子どもの発達特性や個性、家庭環境の理解からスタートし、校長の保育観や社会情勢も鑑みて、子どもと生活を結び付け、理想と現実のどちらかに偏ることなく保育を創ろうとする森川の保育観が中心となって、当時の保育は進められていたと考えられる。今後はさらに当時の保育日誌を紐解きながら、より具体的な保育の実際に迫りたいと考える。

謝辞

資料を提供いただきました奈良女子大学附属幼稚園の先生方に感謝を申し上げます。

文献

- 1) 関信太郎：後援会設立の経過と所感，うなみの園生創刊号，奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会，84-92，1924.
- 2) 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会：附属幼稚園の沿革及概況，うなみの園生創刊号，奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会，55-57，1924.
- 3) 白井英三：当後援会将来の希望，うなみの園生創刊号，奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会，36-39，1924.
- 4) 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会：本誌の発刊に於て，うなみの園生創刊号，奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会，119，1924.
- 5) 奈良女子大学附属幼稚園：奈良女子大学附属幼稚園百年史1912-2012，奈良女子大学附属幼稚園，141-145，2017.
- 6) 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会：附属幼稚園の沿革及概況，うなみの園生第6号，奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会，64-66，1928.
- 7) 横山栄次：生産主義の幼稚園教育，うなみの園生第5号，奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会，1-3，1927.
- 8) 横山栄次：働く気持，うなみの園生第9号，奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会，1-2，1931.
- 9) 横山栄次：所謂作業主義の起り（フレーベルの功績），うなみの園生第10号，奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会，3-5，1932.
- 10) 森川正雄：園芸及手工の新設備に就て，うなみの園生第5号，奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会，3-6，1927.
- 11) 森川正雄：幼児の遊戯と作業の価値，うなみの園生第6号，奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会，1-2，1928.
- 12) 森川正雄：幼児の産業的生活，うなみの園生第9号，奈

- 良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 3-4, 1931.
- 13) 會澤タガエ: 木工遊びに就て, うなゐの園生第6号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 54-57, 1928.
- 14) 松浦喜美子: 園芸だより, うなゐの園生第6号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 57-63, 1928.
- 15) 田中カツ: 玩具だより, うなゐの園生第7号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 118-120, 1929.
- 16) 田中カツ: 玩具だより, うなゐの園生第8号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 104-107, 1930.
- 17) 會澤タガエ: 小さいお客様, うなゐの園生第9号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 5-6, 1931.
- 18) 森川正雄: 子供の生活の研究, うなゐの園生第8号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 15-19, 1930.
- 19) 會澤タガエ: 思ふ事の一ふしを, うなゐの園生第10号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 17-24, 1932.
- 20) 會澤タガエ: 雑感, うなゐの園生第14号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 8-13, 1935.
- 21) 小泉九二子: 子供の嘘言について, うなゐの園生第7号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 32-46, 1929.
- 22) 小平コウ: 思ふこと, うなゐの園生第7号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 48-59, 1929.
- 23) 森川正雄: 奈良の子供の環境と其の教育, うなゐの園生第3号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 1-5, 1925.
- 24) 森川正雄: 快感と良習慣の形成, うなゐの園生第11号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 11-12, 1933.
- 25) 稲葉彦六: 躰について, うなゐの園生第12号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 1-4, 1934.
- 26) 淨謙ちさ子: 二人のお母さん, うなゐの園生第4号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 17-21, 1926.
- 27) 會澤タガエ: 新しい幼児を迎へて, うなゐの園生第6号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 3-6, 1928.
- 28) 森田静代: 育児の一片, うなゐの園生第7号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 71-76, 1929.
- 29) 渡邊浦: 所感, うなゐの園生第8号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 15-19, 1930.
- 30) 二塚鞆吉: 時局と園児, うなゐの園生第16号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 3-5, 1938.
- 31) 森川正雄: 幼時に於ける民族優越性の獲得, うなゐの園生第16号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 6-11, 1938.
- 32) 會澤タガエ: 銃後のお母様方に, うなゐの園生第16号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 11-15, 1938.
- 33) 倉橋惣三: 現下の時局と幼児保育, 幼児と教育, 37 (10), 1-3, 1937. (幼児の教育復刻刊行会編: 復刻・幼児の教育 大正・昭和編, 37, 名著刊行会, 1980. 所収)
- 34) 前掲書32) .
- 35) 浅野美都: 六の組便り, うなゐの園生第16号, 奈良女子高等師範学校附属幼稚園後援会, 22-28, 1938.